

書 評

鈴木 勉・他 著

失語症のグループ訓練—基礎と 122 の課題

竹内 孝仁（日本医科大学）

失語症友の会をはじめとし、各種の「友の会」がほとんど自然発生的に、しかし全国的にかなりの広がりを見るようになって久しい。このような会は、障害をもつ人たちとその家族、これらの人びとの周辺にいる保健婦や施設の職員のやむにやまれぬ思いから誕生することが多く、友の会をつくってはみたものの、さてどのようにそれを運営していったらよいのか迷うことも多いのが現実だったといえる。本書のような指導書が待ち望まれていたのである。

ことばの障害のなかで失語症は脳卒中に多くみられ、彼らは体の不自由さに加えてもう一つの障害に悩むことになる。障害は何であれ行動の不自由さをもたすが、とりわけことばは、人と人との間を取り持つ手段であるだけに、悩みは深刻である。

本書の冒頭の推薦のことばに大田仁史先生が述べているように、ことばの障害はとりわけ人を孤独にしてい

く。失語症を含む言語障害の回復期は、ことばの機能そのものの治療がテーマとなるが、退院後の社会生活で“治す”べきテーマはこの孤独であるといっても過言ではない。ここに「グループ」の意味合いが生れてきて、待ち望まれていた指導書とは、このグループをキーワードとする会の運営のしかたである。

本書のすぐれた点は、失語症のグループ訓練を、専門的な立場に立ちながらも理論に終始するだけでなく、実際のグループ活動のすすめ方を述べている点である。この書物を読んで、日頃行ってきたやり方を再確認したり、わからなかった点が解決して明日からの活動に自信を得る人は多いと思う。STのみならず、失語症を含むことばの障害をもつ人に接する人びとに読んでもらいたい書物と思う。

（B 5 版 193 頁 3,500 円(税込) 1994 三輪書店刊）